

専業主夫になった比企谷八幡が浮気するお話。

ハーミット紫

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

タイトル通りの短編です。苦手な方はブラウザバックをお願いします。

目次

四話	三話	二話	一話
20	13	5	1

一話

高校生の頃に望んでいた馬鹿げた夢がある。専業主夫。

何をどう上手くやったのか。いや、何もかもを間違えたからこそなのかもしれないが、紆余曲折を経て俺こと比企谷八幡は専業主夫として生活をしていた。

『茅ヶ崎いのり』との出会いがなければこうはならなかっただろう。

愛されているという実感は強く感じる。

けれど俺達の夫婦関係は一般的なそれに比べて、些か以上に歪んでいるように思う。

端的に行ってしまうなら重たいのだ。彼女の茅ヶ崎いのりの愛はとても強い。その執着心は過去に身内を失ったことが起因しているのだろう。

まるで幼い子供が大事な物を仕舞い込むように、俺はこのマンションの一室に縛り付けられていた。

「はちまん…?」

いつもと同じ様に、俺の隣に眠っていたいのりが目を醒ます。

いのりは目を醒ますと必ず俺を探す。1日の始めに俺を見ないと落ち着かないのだそうだ。

「おはよう。いのり」

「おはよう。八幡」

朝の挨拶を交わすと抱きついてきた。

これは日課みたいなものだ。その状態でしばらく過ごすのも日課の延長になる。

新婚当時のことになるのだが、先に目を覚ました俺がいのりを起こさないように寝室から出て朝食を作っていると寝室からいのりが飛び出してきたことがあった。目尻に涙を浮かべ、酷く取り乱していたのを覚えている。

それ以来、いのりが目が覚めるまではなるべく寝室を出ないようにしている。

「朝は何にする?」

「いつもと一緒で良いよ」

「ならそろそろ出るぞ。」

「あんまりぐうたらしていたら遅刻するぞ。遅刻」

「……そうだね。そろそろ準備しようか」

「養つて貰っている身だ。」

それを成してくれているいのりの希望は出来るだけ叶えたいと思う。

しかし、彼女は朝は軽く済ませたいようでもいつもトーストとコーヒーだけだ。おかげでかなりの楽をさせて貰っている。

昼も会社の食堂で食べるので、朝はほとんどすることが無い。

それでも朝の時間は貴重になものでいつまでも彼女の望むままにイチヤイチャしている訳にはいかない。

ベッドから出て互いに洗面所に行く。二つある洗面台。右側が俺で、左側がいのり。それぞれの定位置に付く。

いのりより早く済んだ俺は着替えを済ませ、キッチンにて朝食の準備。まだ洗面所のいのりも終われば仕事に行く準備をするだろう。

トーストが焼ける香ばしい匂いが立ち込める。

俺はいのりに合わせているので同じくトーストで済みます、MAXコーヒーとブラックコーヒーの違いはあるが些細な事だ。

出来た朝食をテーブルに並べる。そうこうしている内に準備を終えたいのりがやって来た。

「ありがとうございます。いただきます」

「どういたしまして。いただきます」

初めの内は目玉焼きかサラダでも用意しようかと提案したが、昔からトーストにコーヒーがお決まりの朝食だったからこれが良いと言われ現在に至っている。

程なくして、互いに朝食を終える。そろそろいのりが入社する時間だ。

朝食に使った食器類をシンクに浸け置き、見送りの為に玄関までついていく。

靴を履く前にいのりが抱きついてきた。

「化粧とれるぞ」

一応、気をつけているようで頬擦りなどはしてこないがこれも毎朝のことだ。

「大丈夫だよ。一応、気をつけてる。」

そんなことよりもこれから仕事に出掛ける奥さんに愛してるよって言うって欲しいかな」

「はいはい、世界で一番愛してるよ」

「適当だなあ。けど、元気は出たよ。」

頑張ってくるね。行ってきます八幡」

「ああ、いってらっしゃい」



一通りの家事を終え、自室のパソコンを起動する。

最大手のネット通販会社のページを開き、気になっていた本を数点注文する。

これも翌日には届くだろう。大変便利だが、ただでさえ少なかった外出理由もこれのおかげで無くなってしまった。

食材は専属契約している会社から毎週届く。日用品もこの通販サービスののおかげで外出しなくても手に入る。

いのりは俺を外出しなくても良いようにとれる手は全て行った。おかげで望まずともヒツキーになってしまっている。

今では外出する理由など滅多に無く、ネットでの注文を終え、毎日決まった時間に確認するオートロックから数メートル先の郵便ポストを見に行くくらいしか家から出ることが無い。

「はあ」

堪らず溜め息が出る。

恵まれた環境にいるのは充分わかっている。この息が詰まるような気持ちも、こんな環境に慣れたからこそ感じる贅沢な悩みなのだろう。

そう考えることにして郵便物を見る。マンションの広告に分譲住宅のチラシが数点。今俺が済んでいるマンションは高級といっても差し支えないものなのでこういった広告は後を絶たない。

珍しいことにその中に一通だけ、俺に当てたものがあつた。

「葉山から？」

「おいおい、結婚するのかあいつ」

知人からの結婚式の招待状。どうやってここの住所を…？と思うたが由比ヶ浜あたりから知らされたのだろう。

三浦とか…：大学まで追い掛けて、押しに押したとは由比ヶ浜から聞いた情報だ。それが吉となったのか対に結婚まで辿り着いたようだ。

招待状。いのりは面識のない葉山と三浦の結婚式。1人で少し自由になれる時間kが入るかもしれない。

「2ヶ月後か。出来るなら参加したいが…」

果たしていのりは許してくれるのだろうか。

それだけが気持ちを重くさせた。

二話

結論から言うのならば、意外なことに許可は降りた。

「……いいよ。昔の知り合いも来るんだよね？」

八幡も偶には会いたいよね」

といのりから許可が降りたにはいいものの、この時の苦虫を噛み潰したかのような表情に幾許か後髪を引かれた。

しかし、俺も久しぶりの外出だ。少しは期待が高まっているのは許して欲しい。

葉山達の結婚式を明日に控えた夜。会場で会えるであろう懐かしい面々に少しは期待が高まる。

俺みたいなやつでも知己に会えるとなると機嫌が良くなるようだ。その自覚もあった。そして、それが恐らくはいのりの心の何かに触れたのだ。

その日の夜。彼女は俺を激しく求めた。

よりにもよってこんな日だと思う俺とは裏腹に、いのりは止まらなかった。

ネクタイを緩め、ボタンを一つ外すと見えるであろう位置に痕が残った。きつと狙つてのことだろう。

今となつては収まりを見せていたいのりの独占欲は、俺が旧知と会うと知るや再び燃え出したのだろう。

こんな所に痕があればネクタイを緩めるなんてことまず出来ない。式が終われば直ぐに帰路に付かなくてはならないだろう。

…きつと俺がこう考えるのもいのりの思惑の内なのだろう。

「我が妻ながら恐ろしい…」

下りのエレベーター内で1に近づく数字を眺めながらボヤク。それでも久しぶりの外出なのだ。少しは楽しむことにしよう。

一先ずの目的地は奉仕部の面々+αが集まる千葉駅だ。何年かぶりに由比ヶ浜から連絡があり、出席するのなら一緒に行こうと誘われたのだ。

特に問題も無く千葉駅に到着し、既に到着しているという面々を探

す。

「せんぱーい！こつちですよ。こつちー！」

俺が見つける前にあちらが気づいてくれたようだ。大きく手を振って存在を教えてくれる。

懐かしい呼ばれ方だ。そういえば俺をこう呼ぶのは結局大学に行ってもこいつ1人だけだったな。

その仕草や声が懐かしく、微笑ましい。

「よう一色。お前は相変わらずな感じだな」

「なんですかそれ、久しぶりの会う可愛い後輩に向かってヒドくないですか!？」

こつちは久しぶりに奉仕部の皆さんに会えるの楽しみにしてたのに、開口一番それですか!？」

もうちよつと優しくしてくださいよ」

そう言つて俺の腕を取り左右に揺らす。

やはりあざとい。しかしそんな事は口に出さず、久しぶりの会話を楽しむ。

「悪い悪い、つい懐かしくてな。

久しぶりだな一色。元氣そうで何よりだ」

「はい、お久しぶりで先輩」

微笑む一色は年相応の落ち着きを見せている。

きっと皆が当時のように振る舞えるように、こういう役目を買って出てくれているのだろう。

全く、後輩ながら頭が上がらない。

「やあ、比企谷。久しぶりだな。

君も元氣そうで何よりだ」

「平塚先生！お久しぶりです。

今日はわざわざ車を出して頂いてありがとうございます」
「気にすることはない。

どうも私はこういう役に回ることが嫌いではないらしくてな」

平塚先生は3年の頃に俺達の担任を努めてくれた。

今回、式に招待されているのもそのためだろう。奉仕部の面々が集

まる珍しい機会とあって自ら車を出すことを提案してくれた。
相変わらず尊敬できる先生だ。

「ヒツキー…やつはろー！」

久しぶりー!!」

やたらハイテンションに声を掛けて来たのはきつと由比ヶ浜だ。
振り返らなくてもわかる。つてか君まだその挨拶してるの？

「久しぶりだな。由比ヶ浜。」

葉山達に住所を教えたのおまえだろ」

「そうだけど、どうして久しぶりあつてすぐそういうこと聞くなー
？」

ヒツキーそういうところ変わって無い」

「いや、そのおかげでこうして集まれたから礼を言っておきたかった
だけなんだが…」

「ああ、そうなんだ。」

てつきり怒ってるのかと…早とちりしちゃった」

「すまん、俺も言い方が悪かった。」

ありがとうな由比ヶ浜。こうして皆で会えて嬉しいよ」

「うん、どういたしまして！」

けど、ヒツキーが素直にお礼言うなんてなんか違和感だね」

「ほっとけ」

「そうやってソツポ向くのは変わらないね。」

懐かしいー！」

そう言つて由比ヶ浜は俺の頬を突ついた。

何この娘。酔ってるの？それともシラフでこれなの？

まあ、久しぶりなので分からなくも無い。かく言う俺も少し浮き足
立っているだろう。

「そういえば雪ノ下は一緒じゃないのか？」

ふと1人足らないことに気づいた。

「ゆきのんは家族も式に参加するから行きは家族とだつて！」

「なるほどな。ならこれで全員か。」

戸塚が来れないのが残念だな」

「彩ちゃんどうしても外せない用事があるんだってね。」

久しぶりに会いたかったね」

「ああ、本当に残念だ」

「先輩、落ち込み過ぎて若干キモいです。」

「しょうがないじゃないですか用事があるんですから」

「だって戸塚だよ？」

まあ、祝う側の人間がいつまでも落ち込んで居られないから切り替えていくしかないか。

「では揃ったことだし駐車場に移動するぞ。」

せっかくの目出度い席だ。久しぶりの再開で気持ち弾んでいるのはわかるがあくまで私達は祝う側だ。あまりハメを外さないように」

「先生。なんか先生みたいですよ？」

「一色、君は失礼だな」

隣にいた由比ヶ浜が昔友達の結婚式でハメを外し倒して危うく絶好されそうになったそうだと教えてくれた。

じゃあ、今のひよつとして自分に言い聞かせていたんですかね？車を出すのも自制せざるを得ない状況にするためなのでは…先生エ道中は問題なく、少ない移動時間で会場に到着した。

会場は大勢で賑わっていた。

結構な人数だ。俺の時はもつとこうこじんまりしていたと思うが…いやよそう。これ以上考えるにはきつと良くないことが起こる。間違いない。

「凄い人数ですねえー。先輩の時とは大違いですね。」

「やっぱり友達が居ると居ないのじゃ差が出ますね。しかも、寄りにもよって葉山先輩ですし」

「おい、やめろ」

「優美子と隼人くんだしね。」

「これくらいには当然かも…」

そういう由比ヶ浜も人数の多さに驚いているようだ。一色も驚いていたし、葉山達の式が特別多いだけなのかもしれない。

なんだ。焦って損したわ。

そういえば親父がクラスメイトってだけの関係だけだったのに、結婚式の招待状送って来るやつがそろそろ出てくるから気をつけろって今年の正月に言ってたな。

「ん？平塚先生どこいった？」

「先生ならあそこで捕まってますよ。教師も大変ですねー」

そう言って一色は指差した方向で平塚先生は結構な人数に囲まれていた。

まあ、当然か。良い先生だし、きっと色んな生徒に好かれていた筈だ。

困ったように笑う平塚先生だが、きつと嬉しいに違いない。

「お前も混ざって来なくて良いのか？」

良く知らんが、多分サッカー部の連中じゃないのかあれ」

「いやー、折角若い男連中に囲まれているのを邪魔するのも何じゃないですか？

あの中にもしかしたら平塚先生のことを狙ってる人がいるかもしれないですし、それを考えたらとてもとても…」

そう言った一色に自然と首肯していた。

そう考えると男性陣が少なく感じてきた。

左舷、弾幕薄いよ！何やってんの！！囲め囲め！

そして出来たら貫ってやって下さい。

「2人ともなに黄昏てるの？」

「由比ヶ浜…平塚先生はもう駄目だ」

「へ？…あー、囲まれちゃってるね。仕方無いよ。

私達だけでゆきのんに合流しようか」

「そうですね。受付済ませて合流しましょう！

平塚先生にはメールか何か入れておけば大丈夫でしょうし」
「それもそうだな」

そうして三人で受け付けを済ませる。

途中何人かに声を掛けられる。もちろん俺以外の2人がだ。そうしていると由比ヶ浜が雪ノ下を見つけた。

「あっ!!ゆきのんだー!久しぶり!」

「雪ノ下先輩お久しぶりです!」

「ええ、本当に久しぶりね。会えて嬉しいわ」

雪ノ下を遠目に見つけた由比ヶ浜が一色を引っ張って一足先に合流した。

相変わらず仲の宜しいことで。

「久しぶりね。比企谷くんも…貴方の式以来かしら?」

「…そうだな。久しぶりだな」

「貴方がまさか専業主婦になれるなんて今でも少し信じられないわ」
「安心しろ。俺も実感が無い」

あの生活は本当にそういう関係性のものなのだろうか?

まるでペットのようだ。何もかも受動的にただ生活をするだけの日々。

「…?」

「こんなこというと、怒られるな。」

まあ、平穏な生活を送っているよ」

「…そう」



そういつて笑う比企谷くんの表情は馴染みのないものだった。けれど、一度だけ見たことがある。彼の結婚式の時だ。

その時も彼は祝いの言葉を受け取りながらこんな表情をしていた。

「…そう」

返事はしたけども、本当にそう思っているの？

その疑問が胸の内から溢れて尽きない。

彼の奥さんのいのりさんは、大学生になった彼の前に唐突に現れたように感じた。

それぞれ進路は違えども、奉仕部の3人は良く顔を合わせていた、その回数が目に見えて減り出したのが、彼女が登場してからだ。

「面倒な奴に懐かれた」

回数が減った集まりのなかで彼はそう言った。

二回生の秋のことだ。面倒見の良い彼のことだ。高校の頃のように振り回されているのだろう。

その時はそう思っていた。

三回生の春に、彼の口から俄かには信じ難い言葉が飛び出した。

「就職活動はしない」

…その、なんだ…結婚することになったんだ」

あの時を思い出すと、今でも胸が痛む。

相手は時々彼との話題に上がっていた面倒な奴と評された人。どうしてそんな人と…？

どうして？どうして私は…

それからは殆ど会うことも無く、大学を卒業することになる。

結婚すると聞かされてからは一度も彼とは会えなかった。電話もできなかつたし、メールだつてできなかつた。

…それなのに結婚式には呼んでくれたのよね貴方は。

あれから更に数年が経った今日。やっと会うことができた。
ずっと、ずっとこの日を待ち望んでいた。
何をしたいかなんて、答えは持ち合わせてはいないのに。

三話

「乾杯」

その声にグラスを合わせる。

結婚式が無事に終わり、俺達は場所を移して二次会を始めていた。

残念ながら由比ヶ浜達は葉山達主催の方に行ってしまったので雪ノ下と俺の2人だけだ。

出来たらあとから合流するとは言っていたが、難しいだろうな。

平塚先生は二次会には参加しなかった。学校で問題があつたのか式が終わるとすぐの帰ってしまった。

最後まで俺達の帰りの心配をされていて謝ってくれていた。

残念ながら例え残ってくれていてもこうやってバラバラに行動しているのだから、あの当時のように皆でとは行かなかつたな。

「由比ヶ浜さん達が来れなかつたのは残念だけど仕方無いわね」

「そうだな。三浦と葉山の結婚式だから仕方無いとしか言いようがない」

由比ヶ浜達が葉山達のほうの二次会に参加するなら帰るか。そう思っていたら雪ノ下が声を掛けてきた。

雪ノ下もあちらの二次会には参加しないと告げてきた。貴方もどうせ帰るんでしょう？

なら久しぶりにと雪ノ下が提案したこの二次会は、会場から少し離れることにはなつたが落ち着いて雰囲気の良い店で開始された。

ゆつたりとした個室でソファーに座り、グラスに口をつける。
美味しい。

俺はこういった店に明るくは無い自覚があるので、素直に雪ノ下に賞賛の言葉を送った。

「良い店だな」

「あら、貴方から褒めて貰えるては思はなかつたわ」

俺の隣に座る雪ノ下はそういつて微笑む。

かつてとは違う距離に少し戸惑いを覚えると共に、雪ノ下のかつてと変わらぬ笑顔に懐かしさがこみ上げる。

「雪ノ下さんか？」

「その通りよ。」

私はあまりこの手のお店に詳しくは無いから姉さんを頼ったの。

あの人にこの手のことを聞けば間違いないもの」

「相変わらずお凄いことで」

「そうね。けど、姉さんの話はこのくらいにしておきましょう。」

噂をすれば何とやら……でしよう？」

「確かにそれは困る」

そういつて2人一緒に笑う。

高校を卒業して、大学に進学して直ぐは奉仕部で集まって今みたい
に何気無い話で笑いあったな。

「あら、グラスが空よ。」

私も追加で頼むから、ついでに頼んで上げるわ」

あんまり飲み過ぎてもな……

それに、いくら相手が雪ノ下とはいえ男女2人きりだ。既婚者とし
て避けるべきことだが、まあ、良いか。

次はまたいつになるかわからないのだから少しくらい羽目を外し
ても構わないよな。

「そうだな。なら雪ノ下と同じので頼むや」

「わかったわ」

雪ノ下はそう答えると手慣れた感じで注文をした。

聞いたことの無い名前の酒だが、雪ノ下が勧めてくれただけあって
美味しく飲みやすい。

「専業主夫生活はどうかしら？」

「…自分でもまさかなれるとは思っていないなかつたから今でも不思議だ
な。」

恵まれてるよな。何不自由無い生活をさせてもらっているよ」

「…そう」

雪ノ下は俺の答えに特に何かを言うわけではなく、そう答えて酒を
煽った。

雪ノ下らしく無い姿だが、美人がすると様になる。

「そういえば昔…」

その後も他愛の無い話が続く。

懐かしい思い出話に花が咲き、酒が進む。

こうして楽しく過ごせるのも随分と久しぶりな気がする。

いつ以来だろうか？ 思い出そうにも頭は回らない。少し飲み過ぎたかもしれないな。



「…自分でもまさかなれるとは思っていなかったから今でも不思議だ。」

恵まれているよな。何不自由無い生活をさせてもらっているよ」

彼の答えはまるで模範解答のように聞こえた。

あらかじめ考えていた答えを言っている。そんな感じがしてならない。

彼は笑って答える。それなりの期間の付き合いがあつたはずなのに見たことの無い笑い方だった。

彼はこんな笑い方をする人だったのだろうか？

「…そう」

自分から聞いておいて素っ気ない返事をしてしまう。

嫌な女。それ以上は聞きたくなくて新しい話題を探してしまう。

「そういえば昔…」

露骨な話題替えだ。これは酷い。

けど彼は咎めるわけでも無く、その不出来な誘導に乗ってくれた。

貴方はそういう人よね。それが懐かしくて、嬉しくあるのに胸が痛んだ。

「比企ヶ谷くん？」

そんな拙い手で始まつた思い出話は想いの他楽しいものになつた。

話題は二転三転したけれども、始まめのような気不味さを感じることも無くな長く話込んだ。

「眠ってしまったの？」

少し席を外してから戻ると彼はソファーに深く座り、眠っていた。

「…」

彼を起こして、御開きにする。

もし酔って目を覚まさずそれが難しい場合は、気がひけるけれども彼の携帯電話を借りて奥さんに連絡して彼を引き取ってもらう。

「…」

しなくてはいけないことはすぐに頭に浮かんだ。

けれど私は彼の隣に座り、暫く彼の横顔を見つめていた。

「比企ヶ谷くん。起きて、ここで寝るのはいけないわ」

どれくらいそうしていたらだろうか。

ようやく私は軽く肩を揺すり、覚醒を促した。

けれど彼は少し寝苦しそうにただけで、起きる様子はなかった。

「…」

他意はない。

ただ介抱するだけなのだから。

式は終わつたのだから、ネクタイくらい緩めれば良いのにそれをしてない彼が悪い。

そつとネクタイを緩め、ボタンを一つ外す。

「…これは」

これは、きつとそういうものなのだろう。

だから彼はネクタイも緩めずにいたのだろう。

彼の奥さんによるものだろう。夫婦なのだから何もやましい事では無い。彼らにとって当たり前の日常の一つ。

そう分かつている筈なのに胸は痛んだ。

「…ごめんなさい。携帯電話借りるわね」

気持ちを切り替えて、テーブルに置いてあつたそれを手に取る。

返事は無いとは思っていたけれども、一応声をかけておく。

「駄目ね」

当然のことながら携帯電話にはロックが掛かつていた。

「…どうしようかしら」

彼の携帯電話を借りたのは当然のことながら、私が彼の奥さんの連絡先を知らないからだ。

私は彼の自宅の場所も分からないし、現状は八方ふさがり。

「…」

私の家に連れていくのが良いのかしら。

道義には反するけれども、現実的な案ではある。

タクシーを拾って私の家に向かう。途中で彼が起きたのならそのまま行き先を彼の自宅にすれば良い。

「…もしもしタクシーを、一台お願いします。

ええ、場所は…」

しばらくしてタクシーが到着した。未だに眠っている彼に声を掛ける。

起きてくれればそのまま彼を自宅に送れば良い。

「…うん」

彼は目を閉じたまま、曖昧な返事をした。

何度か呼び掛けるが、同じような反応ばかりでラチが明かない。

幸い肩を貸す必要はあったけれども、タクシーまでは歩いてくれた。

私の葛藤や後ろめたさを他所に、彼はタクシーが私の家に到着しても眠っていた。

「…」

四苦八苦しながら、どうにか彼を自宅に誘導出来た私は一人飲み見直すことにした。

彼は私のベッドで休ませた。

お酒に弱かったのかもしれない。学生時代にはそんな素振りは見せたことは無かったけど。

私がかかなり強い部類なのは自身でも不思議だ。

「熱くなってきたわね」

着替えもせずに飲み直したのを今更ながら後悔する。

眠ってしまう前に着替える。その前に化粧を落とさなくてはいけない。

シャワーだけでも浴びたかったけれど、今日はかなり飲んでいるし諦めよう。明日の朝一番に浴びる。そう決めたら我慢もできる。

化粧を落として着替えようと思った所で、着替えは寝室に取りに行かなければ出来ない事に気がつく。

「仕方無いわね」

寝室に向かう。部屋に入ると規則正しい呼吸音が聞こえる。

姉が引越し祝いにくれた一人で使うには大きすぎるベッド。彼の隣には一人が横になれるぐらいのスペースが空いている。

「…」

煩いくらいに心臓が早鐘を打つ。

一歩、また一歩近づいてしまう。起こさないように静かにベッドに腰掛ける。

そして暫く彼を見ていた。いけない事だとはわかっている。

それでも私は、その衝動に逆らうことができなかった。

並んでベッドに横になる私と彼。

彼にとつては不本意なことだろうけれども、私は止めることが出来ずにいる。

ずっと好きだった。今迄ずっと忘れようとしていた。けど今日は久しぶりに彼に会ってそんなことは到底無理なのだと気がついた。

面倒な女だ。けどそんな女と2人でお酒を飲んで、挙句に家に連れ込まれるなんて貴方も悪いんだからね。

四話

「……ここは？」

明け方、彼はようやく目を覚ました。

身体を起こして辺りを見回す。そこで目が合った。

「雪ノ下……？」

「おはよう比企ヶ谷くん」

彼は明らかに狼狽えている。

彼は下着姿だったし、私は何も身につけずに布団を掛けているだけだからだろう。

ここまで来たらもう後戻りは出来ない。

今すぐ謝つてしまえ、でなければ人の家庭を壊す事になる。

頭の中で私の常識がそう警鐘を鳴らす。確かにその通りだ。そんな事するのは最低の人種だ。

そんな事はわかっている。だけど、自分や世間一般の常識に従って生きて来た私の手からはいつも大事なものが零れていく。

ならそれは私にとってあまり意味の無いものだったのではないだろうか。

「そんな……」

男女が同じベッドに寝ている。その意味する所は誰にだって明快だ。

「……ねえ、比企ヶ谷くん」

私も身体を起こして彼に枝垂れかかる。

「……すまない」

彼はまだ潔白なのにそう謝ってきた。

覚悟をしても罪悪感を苛む。けど私はもう決めた。

「謝らないで……私、嬉しかったもの」

彼の首に手を回し、耳元で囁いて頬に口付ける。

彼はそれを拒まなかった。

「俺はなんてことを……」

後悔する彼に胸が痛む。けど、触れ合っているこの感触にそれ以上

の喜びを感じる。

「私のこと嫌い？」

そう聞いてやつと彼は私を見てくれた。

「そんなわけ…」

彼はそれ以上は言葉にしなかった。

「嬉しい」

「けど、こんなのは駄目だろう」

そう言っただけは私の手から抜け出し、私に身体を向ける。

「すまなかつた雪ノ下。」

こんなことで許されるとは思わないが、それでも謝らせてくれ

「…」

「帰ってからのりにも全部話す。」

俺が悪いんだから出来る限りの償いはさせてくれ

「そう…」

彼のらしい姿に懐かしさを感じる。

「私、昨日が初めてなの」

「は？」

「初めての相手が貴方という意味よ」

「そんな…」

彼は驚愕した表情を浮かべる。

「良い年してと思うかも知れないけど、貴方が初めてなのよ。」

貴方はかなり酔っていたし、殆ど覚えていないでしょうけどね」

「…」

「だからね比企ヶ谷くん。」

出来る限りの償いがしてくれるというのなら、もう一度だけ抱いて

「そんな、出来るわけないだろう！」

「奥さんには勿論黙っているわ。だからお願い」

「だからってそんなこと出来る訳が…」

それはそうだろう。酔った勢いならまだ許されるかも知れない。

けど私の願いはそうではない。到底認めることなんて出来ないだ

ろう。

「ずっと好きだったの。比企ヶ谷くん。

お願いします。確かな思い出が欲しいの」

彼はその言葉に顔を歪めた。

やがて諦めたような表情を浮かべ、震える手で私を抱きしめてくれた。

最大の懸念は行為の際の出血だった。

私にとっては幸運な事だったけれども比企ヶ谷くんにとっては不運な事に、私はあまり痛みを感じず出血もしないタイプだったようだ。

昨日の今日だから出血したのだろう。そう言えば彼は納得してくれた。

ベッドで互いに向き合い話をする。

「ねえ、また会ってくれる?」

彼の手に私の手を重ねて、そのまま指を絡めた。

「それは…」

「偶にで良いの。お願い」

一度だけの関係にしよう。行為の前はそう思っていた。

けれど、そう思っていた昨日がまるで嘘の様に私は彼を求めた。甘美な時間だった。

こんなに満たされたのはいつ以来だろうか。

彼が離れていってから始めてかもしれない。

「…出来ない」

予想通りの返答。

この頑なさには彼の良い部分だ。

懐かしさを感じて嬉しくなる。

けれど、彼が絞り出した答えは私の望むものではない。

「そう…」

「雪ノ下…?」

もし彼をまた失うとして、私は耐えられるのだろうか。きつと駄目になる。以前とはまるで訳が違う。

彼に女の喜びを教えてもらった。彼に求められた事実が胸を占めている。

そのことが、また一人になることの恐怖を耐え難いものだと予感させる。

「大丈夫か？」

気付けば私は涙を流していた。

不思議な事に泣いて居るのに感情は穏やかだった。

なんて面倒な女だ。そういう風に自分のことを客観視することすらできた。

名残惜しいけれども、絡めた指を解く。彼はすんなりそれに応じる。

私から指を解き手を離れた。けれどすんなり応じられたことが去来していた劣情を煽る。

彼は別の人のものなんだと、そんな些細な仕草が現実を突きつける。

身体を起こす。掛けていた布団は身体から落ちる。

昨日まで経験が無かった女の癖なのに、裸を見られても気にならなかった。

動く鈍い痛みが自覚できた。その痛みが湧き上がっていた劣情を幾許か慰める。

そして緩慢な動作で私は向き合い寝そべる彼に覆い被さる。

「…雪ノ下？」

そう問いかける彼に口付けた。

長く深く、これは行為の際に彼がしてくれ無かったことだった。

きつと、奥さんに義理立てしていたのだろう。

それが解っていたけど私は行為に及んだ。

「おまえ…」

「駄目なの。もう貴方無しで生きては行けない。

お願い。偶に会ってくれるだけで良いの。

奥さんにバレないようにするし、連絡だって私からはしない。

ただ、こうしてこの部屋を都合の良い時に訪れてくれるだけでいい

の

「…断ったらおまえはどうするんだ？」

「…どうしようかしら。」

けれども、もし貴方が合ってくれないのなら……死んじやおうかしら

きつとこう言えば彼は断らない。それを知っていて私は彼に懇願した。

もし、逆の立場なら私はそんな女を殺してやりたくなくなるほど憎むだろう。

それを理解していながら、私は彼を繋ぎ止める為にこんな浅ましい行為を繰り返すのだろう。

「…わかった」

絞り出すように出された声。

いつかを思い出してしまふ。こんな彼の顔はみたくは無かったのに。

目を背けたくなくなるような彼の表情。その瞳が終焉を予感させる。

私は、きつと遠くないうちに全てを失う。

そして、独りになった私は馬鹿な事をしたと泣くのだろう。

その現実が余りにも恐ろしくて、甘えるように彼に二度目の口付けを落とした。